

自然な聞こえ方 (8)

大ブレイクと大ヒットのちがいは

先日ちょっと面白い出来事がありました。30年以上前の私の教え子がML(メイリングリスト)を作っていて私もそれに時々参加するのですが、仮にB君としましょう。彼が今をときめくレイザーラモンHGなるタレントが自分の出身高校の後輩であることを嘆いて投稿してきました。それに対して私が同意を示すとあとはバトルとなってしまう、収集がつかなくなってしまいました。否定派の意見は「何の芸もないフォーというだけの・・・」というものですし、支持派は「一生懸命やってあそこまできたのだからエライ」で、中間派は「需用のあるところに供給あり」てな具合です。あのコスチュームとサングラスは一種の覆面であり素顔が見えないことがHG氏にとっては武器でもあり、致命傷でもあると思うのですが。プロレスラーでも覆面の選手がいるように芸能人でもタモリは最初は海賊眼帯をしていましたよね。芸能人は目立ってなんぼですから目くじら立てることもないと思うのですが「公序良俗」すれすれではキワモノと言わざるを得ないでしょう。

音楽の世界にもこのキワモノがたくさんあります。モーツァルトの作品にも、ベートーベンにだってありますしあのジョンケージだってそうかも知れません。あんまりきっちり線を引くと彼らも迷惑するかもしれません。

さて、先月号で宇多田ヒカルを例に挙げて情報とタレントの関係に触れましたが、このHG氏の場合でもそうですが、自力であそこまで行けるわけがありません。

「大ブレイク」という言葉を最近よく聞いたり目にしたりしますが本当の意味は次のどれでしょう。①大ヒット、②大騒ぎ、③大怪我、④大暴れ、⑤大開拓、⑥大宣伝開始・・・もう良いですね。

私の回りの殆どの人は「①大ヒット」の事と捉えていました。Breakという英語の本来の意味は壊すとか折るとかの破壊的で非生産的なイメージなのですが、辞書の終わりの方に「情報や宣伝活動の口火を切るとか開始する」と小さく出ているのが正解です。従って〇〇というタレントが大ブレイクという言葉で大ヒットと捉えたと置いてきぼりにされた自分がそこに有るわけですが、宣伝開始という意味ならば同じスタートラインに立てるわけです。

もうすっかり目にすることが無くなりましたが、2年前まで、健康関係の雑誌「わか〇」「ゆび〇」「〇快」などの新聞広告で「〇〇を飲んで△△が治ると大ブーム」とか「□□したら■■になったと大ブーム」と1誌だけでも数回「大

ブーム」とか「大評判」を連発していましたよね。何かの法律に触れたのか自粛したのかもう今ではせいぜい「大検証」くらいになっています。それは誰が考えても「大ブーム」というのを読むまでは知らなかった自分は置き去りにされたと無知を嘆きますよね。あれは正しくは「大ブレイク」だったんですよ。

カラヤンは嫌いだと言っていた生徒にワルターのジャケットに入れたカラヤンを聴かせると「うーん。やっぱりワルターは好いな〜」と感動していました。人間は未知なる物にラベルを貼ります。わからない時は貼られているラベルを信じます。だから耐震設計のいい加減なマンションも売れるのですね。

そもそも感覚を使って事物と接する我々は、感覚を通して二つの方法でラベルを貼ります。一つは英語で言うと【Look】【Listen】【Touch】という意識を外に向けた感覚で日本語なら【聴く】【見る】【触れる】です。もう一つは【Hear】【See】【Meet】という外から意識を刺激する感覚で日本語なら【聞く】【見る】【出会う】です。

我々は音楽に限らず夫婦の会話でも聴いている積もりでも聞いている時があるように、この外向き【OUT】な感覚と外からの【IN】な感覚は絶えず交互に動いているものです。この動きを止めるには【注意力】が必要です。もし音楽会に行って終始注意力を使わなければならなかったらとても疲れる音楽会になるでしょうし、一度も注意力を使わなければ心地よく眠れたことでしょう。

私たちが初めての音楽やタレントに接するときそれが予期しない【出会い】ということもあります。事前に情報を仕入れて臨む【チェック】ということもあります。

ただ、これだけ情報過多の時代になりますと、自分ですべてのエリアにアンテナをはることもできず、24時間チェックすることもできません。また業界そのものも死活をかけた競争社会です。そこで群衆は基本的に「無知」とであるとする一方で「無知と言われたくない心理」を巧みに操り「ブレイク」を仕掛けるのが業界でしょう。ブレイクは良しとしてそれを「ブーム」にするのはやはり我々からの手応えつまり「ヒット」なんです。ヒットの連続がブームですから、やがては「大ブーム」になるでしょう。ブームの中にいる自分は自然な聞こえ方を経験しているのでしょうか？

自然な聞こえ方はそのような情報操作の影響の無い条件で【出会う】音楽であり、やがて自然に注意力が働き、それに【はまる】自分を予感するようなのではないのでしょうか。